『総合政策論叢』第31号（2016年３月）
島根県立大学　総合政策学会

［翻訳］

ガーフィンケルによる社会学の古典のテーマの再生[1）訳注1）]

リチャード・A・ヒルバート著
中　川　　敦・松　木　洋　人訳

要旨
１．序論
２．パーソンズによる社会学の古典の否定
３．エスノメソドロジーによる再生
４．「伝統的社会学」へのエスノメソドロジー的批判
　　の帰結：合理主義的民間科学としての機能主義
５．機能主義的合理化とアノミー防止儀礼
６．結論

要旨

デュルケムとウェーバーから機能主義を導き出すために、パーソンズは彼らの20ほどにもわたる理論的主張とはっきりと手を切らねばならなかった。機能主義的社会学の基礎には、古典のテーマの明確な拒絶がある。この基礎こそが、パーソンズ的な社会動学についてのガーフィンケルの経験的な研究によって引きはがされたものである。機能主義の不適切な部分を修正する中で、パーソンズが拒絶した多くのテーマがエスノメソドロジストたちによって、その形こそ変えてはいるが、思わぬなりゆきで再生され発展させられている。これはガーフィンケルと古典的な理論家が同じことを言っているということではなく、多くは認識されなくなってしまった何らかの歴史的連続性の指摘である。これらのテーマの連続性を認識することは、社会と社会的実践についてのよりよい革新的な見方を獲得するということである。またそのような視点は、いかにしてそしてなにゆえに機能主義的な理論が、ウェーバーの合理化とデュルケムのアノミーを防ぐ儀礼の一例としてそもそも登場したのかについての新たな理解も与えてくれる。

１．序論

ほとんどの社会学的伝統は、１度や２度は、偉大な社会学の古典の１つあるいはいくつかの中に、その根拠を主張しようしている（Alexander 1987）。こうした努力は普通、現代の研究プログラムから見た古典的な文献の回顧的な読み方、すなわち古典の「真実」、あるいは「そもそもの」意味、あるいはその古典の著者が結局「本当に意図し」ていたことという観点から古典を作り直す読み方を必要とする（Coser 1981; Fine and Kleinman 1986; Jones 1977）。そうした解釈は、そうでなければバラバラの理論が、お互いの観点から読まれれば、そうでなければ認識されなかった共通性を持っていると主張する、理論的な統合への執着の特殊例である。ワトソン（1992）が述べているように、最近の社会学では統合

すること自体がいくぶん神聖な肖像となっており、私ならそれにフォーマル・セオリーに関する動きを付け加えるが、その広がりは流行と言ってよいくらいに達している。古典に対するほぼ普遍的な敬意と結びついて、古典的な文献と現代の社会学との統合は、現代の理論が自前で生み出しうる様々な信頼性に加えて、尊敬に値するという雰囲気を現代の理論に与えてくれる。その顕著な例が、ストーンとファーバーマン（1970）が提案したデュルケムとシンボリック相互作用論の統合である。

長く賞賛されるに値することであるが、エスノメソドロジーはこのような統合や伝統への根拠づけにとらわれていないという点で際立っている。実際、初期のエスノメドロジーは、過去の全てのもの、その全てをエスノメソドロジーでないもの、つまり、「伝統的社会学」という一般的カテゴリーの中に位置づけて、エスノメソドロジーとはっきりと対比するという特徴づけを行っていた（Zimmerman and Wieder 1970; Zimmerman and Pollner 1970）。ときにはエスノメソドロジストは、デュルケムの「社会的事実」や「外在性」、ウェーバーの組織理論のようなアイデアを彼らが推奨する研究の方向性への対抗例として用いてきた（たとえばWieder 1974; Bittner 1965）。彼らは、一方にエスノメドロジーがあり、他方にエスノメソドロジーと対立するものとして、社会学があるような口ぶりのときすらあったようだ（Mehan and Wood 1975; Wilson and Zimmerman 1979/80）。

エスノメソドロジストたちが伝統に無関心であるのは、おもに彼らのビジョンの革新性のためである。一方で、エスノメソドロジーの理論的洞察の多くは、社会学という学問的出自よりも、現象学や日常言語の分析のような哲学上の同時代的な発展から引き出された（Heritage 1984: 37-74; Mehan and Wood 1975: 192-204）。他方で、こうした同時代的な洞察の源泉もエスノメソドロジーの主要なアジェンダにとっては二次的なものであった。そのアジェンダとは、社会の経験的な研究であり、そこでいう社会とは、形式的な理論化や形式的に統制された研究方法によって成し遂げられた結果としての社会ではなく、「物事の具体性」の中に見いだされる社会のことである（Garfinkel 1988: 106）。つまり、伝統や理論一般に注目するかわりに、詳細に注目するようになったのである。エスノメソドロジーの研究方針についての説明の中では経験的な研究を貫く暗黙の理論的な志向が緩やかに述べられているにもかかわらず（Zimmerman and Pollner 1970; Zimmerman and Wieder 1970を見よ）、理論的な言葉でエスノメソドロジー的な主題をはっきりと体系的に明言することで、さらなる経験的な研究が明らかにするべきことが前もって制約されることへの恐れがあった。そしてこのことは、エスノメソドロジーの道筋をその知見が最も啓発的である地点からそらせてしまいかねない。このような理論への無関心の不幸な結果が、さまざまな研究が互いに漠然としたあるいは周辺的な関連しか持っていないという誤解を招きやすい印象であった（Heritage 1984: 1; Wilson and Zimmerman 1979/80: 52を参照）。メハンとウッド（1975: 152）は、エスノメソドロジー内部に本質的に異なる「諸理論」と「諸方法」が存在する状況を解決することにはっきりと反対している。

しかしながら、より最近になって、エスノメソドロジストたちは自分たちの研究の趣旨を理論化し始めた。その顕著な例は、ヘリテッジ（1984）、ウィルソンとジンマーマン（1979/80）、メイナードとクレイマン（1991）である。慎重な理論化は必ずしもエスノメソドロジーを台無しにするものではなく、実際のところ、エスノメソドロジストたちにも一般理論家たちにも同様に有益なものになりうるという新たな感覚を私は共有している。し

かし、理論的統合と古典の正統性を気まぐれに主張することに対する深い疑念もまた私は共有しているのである。

そうは言いながらも、やはり私は、エスノメソドロジーはデュルケムとウェーバーにその歴史的な起源の所在を正しく主張することが可能であると論じたい（Hilbert 1992）。こうした繋がりを見いだすことは、単に社会学の古典をエスノメソドロジー的研究の観点から、あるいは逆にエスノメソドロジー的研究を社会学の古典の観点から読み直すということではなく、社会学の古典、エスノメソドロジー、そしてその間で影となっているタルコット・パーソンズという３世代にわたる著者たちの文献の中に見いだせる歴史的な過程を目撃するということだと、私は主張する。ガーフィンケルが関心を寄せたテーマがパーソンズに由来すること、そして彼の経験的な研究がパーソンズ理論の問題含みの弱点に向けられていることは間違いない（Heritage 1984: 7-36を見よ）。そして、パーソンズがこうした弱点を含んだ自身の理論を発展させるために、デュルケムとウェーバーの主要な文献を用いたことも疑いない。その由来の細部は『社会的行為の構造』を検討すれば見いだすことができ、ガーフィンケル（1988: 104）はそこに、エスノメソドロジーの「起源」を見いだすことができると述べている。明らかにされないままなのは、これら２つの歴史的結びつきが、社会学の古典とエスノメソドロジーというその両端に位置して発展してきたものの関係にどういう帰結をもたらすのかということである。

もしパーソンズが自分で主張しているように、古典から自らの理論を導き出しただけなのだとしたら、エスノメソドロジストたちが明らかにしたパーソンズの機能主義の弱点は同様に社会学の古典の弱点でもあるというのは当然の公理である。しかし、1970年代の「脱パーソンズ化」運動は、その仮説の大半を葬ってしまった（Pope 1973; Cohen, Hazelrigg and Pope 1975; Pope, Cohen and Hazelrigg 1975）。まったくのところ、パーソンズと古典との明白な結びつきはもはや当然の事実ではない。実際、パーソンズは私が先ほど言及したもの、つまり、何でも必要なものを古典の文献の中に読み込んだりそこから引き出したりすることで、自分自身の理論を古典の中に根拠づけようと試みる理論家たちの１つの実例であるように思われる。そして、たしかにパーソンズは彼の行為によって暗黙の正統性を手に入れたのである。事実、デュルケムとウェーバーを英語圏に紹介することを通じて、彼は二重の正統性を獲得した。彼の機能主義が少なくとも1950年代の間は「真の社会学」としてのヘゲモニーを握っただけではなく、彼のデュルケムとウェーバー読解は優に1970年代までは最も信頼のおけるものとしてほぼ議論されずにいた。このこと自体もエスノメソドロジーによる社会学についての主張を抑制してきたのかもしれない。パーソンズと手を切ることは、デュルケムとウェーバーと手を切ることになりうるからである。しかし、いったんパーソンズと古典との明白な関係が崩れてしまえば、エスノメソドロジーによる「伝統的な社会学」への批判は、その大半がパーソンズの機能主義に向けられた議論であることがわかるようになる。つまり、その結果として生じた社会学の古典とエスノメソドロジーの関係は、いまだ明確にはされていないのである。

２．パーソンズによる社会学の古典の否定

エスノメソドロジーのルーツは古典にあると主張できるという私の議論の根拠は、エスノメソドロジーがまさに最初の手がかりをつかんだ点であるパーソンズ理論の弱点と、

パーソンズが自身のテクストの中ではっきりと古典と手を切った点とが、ほとんど一対一の対応をしているということにある。これらは興味深いテクスト上のポイントである。なぜならそれはパーソンズが多かれ少なかれ故意に、自身の理論がデュルケムとウェーバーによって暗示されていると主張するために、しなければならなかったことを示しているからである。パーソンズは、デュルケムとウェーバーによる*20ほどにわたる重要な理論的主張*を拒否し、本質的に、自身の理論をこうした拒否の上に打ち立てている。その結果は社会学の古典を否定し抑圧することに基づく機能主義的社会学であり、ガーフィンケルがパーソンズ的な機能主義を受け継いだ時、彼は同時に社会学の古典に対するこの否定的なイメージもパーソンズから受け継いだ。それゆえ、ガーフィンケルが彼の経験的な研究をパーソンズの弱点に向けて行ったとき、彼は同時に、社会学の古典が被った損害を打ち消し、パーソンズが抑圧していたまさにそのテーマを蘇らせたのである。その際ガーフィンケルは、古典の文献の中に隠されている失われたテーマを故意に救い出したのではなく、経験的な細部の中に、それらを蘇らせたのだということを、私は強調したい。したがってパーソンズを否定する中で、ガーフィンケルはパーソンズによる否定を否定し、古典が負った傷を肯定的な形式へと反転させたのである。喩えを変えれば、デュルケムとウェーバーの洞察と革新は、パーソンズをすり抜けて、劣性遺伝のようにガーフィンケルに受け継がれたのである。そして、ガーフィンケルは、デュルケムとウェーバーの表現型を復活させ、これまで想像もしていなかった方向へとそれらを導いたのである。デュルケムとウェーバーのもともとのテーマがほとんど認識できなくなっている理由は、ガーフィンケルの経験的な研究の革新的な特徴のためでもあるが、機能主義による古典についての主張のせいでもある、と私は考えている。

パーソンズの古典との決別は、彼自身がその断絶を認めて公言している場合に最も明白である。たとえば、デュルケムは経験的社会の道徳的性質について論じる中で、道徳と社会は等価であると述べている（Durkheim 1938: 228）。この意味で、道徳を奪われた社会は考えることができない（Durkheim 1933: 200-206; 以下を参照Giddens 1971: 69-72; Lukes 1972: 140-157）。パーソンズ（1968: 392-395）はデュルケムによるこの等置を「誤り」と見なして、社会と道徳を２つの体系的な領域、つまり、事実的なものと規範的なものにそれぞれ分離しようとした（Hilbert 1992: 55-57）。パーソンズはまたデュルケムによる他の重要な等置、つまり社会と客観的実在の等置を拒絶することにも大いに骨を折っている（Durkheim 1947: 206）。デュルケムにとっては、この等価性は原始社会と同様に近代の複雑な社会にもあてはまり、自然科学の実在を含むように拡張できるものであった（Durkheim 1947: 13-20; 以下を参照Alexander 1982: 263-267, 276-279; Coser 1971: 139-140; Bloor 1976: 40-44; Lukes 1972: 444-449）。パーソンズにとって、この等置はデュルケムの実証主義への過剰な肩入れがもたらした倫理的相対主義と観念論への堕落を表している（Parsons 1968: 425-426）。このためパーソンズは社会を実在と分けて、（欠陥がありうる）社会的実在と（科学的、客観的な）非社会的実在との区別を維持したのである（Hilbert 1992: 71-72; 詳細については1991を見よ）。同様にパーソンズはウェーバーにも直接的に異議を唱えており、それが最も顕著であるのは、理念型の方法論上の完全性（Weber 1949 対 Parsons 1968: 601-624; Bershady 1973: 55-64を参照）と「純粋合理性」と合理化の分析上の可能性（Weber 1978）についてである。彼は後者をウェーバーの他の全ての難点の根本にある「中

心的な方法論上の難点」と呼んでいる（Parsons 1968: 607）。

重要な文献上のテーマを単に無視するという、より巧妙なやり方でも、パーソンズは古典と手を切っている。たとえば、それはウェーバーが社会組織の実在そのものについての「物象化」を避け、理念上の制限をしている点である（Weber 1978: 14-27; 以下を参照Pope, Cohen and Hazelrigg 1975: 418; Cohen, Hazelrigg and Pope 1975: 230n; Collins 1986: 44-45; Giddens 1971: 150-151）。ウェーバーにとってこのような制限は、官僚制の構造的な統合性に関する主張にも拡張されている（Weber 1978: 954; Hilbert 1987を見よ; Hekman 1983を参照）。実際、ウェーバーにとって、社会が何であるか、それがどのように作動しているかについての行為者の多様な主観的な印象の統合性は、その内容が何であれ、同じ普遍的な「心理学的なルーツ」を通じて維持されているのであり（Weber 1978: 1116）、行為者自身の主観的関与の真偽にかかわらず、社会学者はそれらを探究することができるはずである（たとえばWeber 1978: 28, 241-242; Hilbert 1992: 117-120）。パーソンズはこうした問題を、彼自身の理論の展開の道筋にとって必要不可欠な理由のために無視している。同様に、厳密な社会統合の不可能性、社会に関する安定的な印象を維持し、アノミー問題を避けるための「犯罪」といったラベルの産出を含んだ儀礼的な実践の必要性（Durkheim 1933: 85-103; 1938: 70; Hilbert 1986; 1989; 1992: 47-48, 84-88）に関するデュルケムの見解にパーソンズは全く注意を払っていない（Durkheim 1938: 69-70; Coser 1971: 142）。言い換えれば、集合意識は人間の具体的な行為を必然的に超越しているとデュルケムが主張する理由をパーソンズは無視しているのである。

まさに彼が否定したようなポイントで社会学の古典を否定することによって、パーソンズは自分自身の理論をあたかもそれが古典のアイデアに基づくものであるかのように、そして、デュルケムとウェーバーによってはうまく実現されなかったが、彼らが暗示すらしていたものであるかのように展開することができた。以下は、そのいくつかの例である。１）デュルケムによる社会と実在の等置の否定によって、社会と客観的実在の分離が生み出され、科学者にとっての客観的な「事実的秩序」（Parsons 1968: 91-92）を、社会の成員がその秩序を認識しそれを自明とする方法的なやり方からは独立して存在させることが可能になった。ウェーバーの物象化に対する警告を無視することもこの目的にかなっている。２）デュルケムによる社会と道徳の等置を否定することで、社会と道徳の分離が生み出され、別個の分析的に演繹された道徳的秩序、「規範的秩序」（Parsons 1968: 91-92）が事実的社会の正規の原因として可能になった。３）デュルケムを観念論と主張して批判することで、主観性が社会それ自体の内部で生み出されるのではなく、個人という有機体から生じることが可能になった。このことが規範的秩序への「主観的敬意」の基盤（Parsons 1968: 390）と２つの秩序を因果的に結びつける動機づけを提供している。その意味で、パーソンズは主観性を、デュルケム的な文化への埋め込みから切り離し、それをそもそも社会の原因となるメカニズムに結びつけたのである（Pope 1973: 409; Pope Cohen and Hazelrigg 1975: 419）。４）集合的道徳の本質的な超越性についてのデュルケムの見解を否定することで、具体的な行為者が実際の道徳を示すことができるという文字通りの同調がありうることになり、また、規範的秩序は規則の集合、つまり結局は規範と価値である（Parsons 1968: 312, 314）というパーソンズの主張が可能になった。パーソンズはデュルケム自身が彼の「集合意識」という用語にこの規則の集合体という意味を含ませていたと述べてい

る（Parsons 1968: 377）。デュルケムが道徳を規則と見なしていたという何の明確な証拠もなく、そして、デュルケムが規則の分析上の不充分さによく気づいていたという証拠がかなりあるにもかかわらず（たとえばDurkheim 1933: 200-229; Hilbert 1992: 30-32を見よ）、パーソンズはこのことを繰り返し主張していた。

これらはパーソンズによる古典のテーマの抑圧のわずかな例にすぎない。おそらくパーソンズの全ての抑圧の中で最も大胆なものは、デュルケムとウェーバーの双方によって強く信奉されていた、科学の実用的な基準である経験主義を、彼が暗黙のうちに拒絶していたことである。パーソンズは確かに自身の研究を経験的なものと考えていた。しかしそこには、彼が理論を分析的に引き出すことができたという単純な事実がそれ自体、理論の経験的な検証であるという奇妙なねじれが加わっていた（Parsons 1968: 719-726）。アレクサンダー（1984: 152-169）はこのことについて、経験主義と分析的な理論化の相対的な優位性に関するパーソンズの「方法論的なアンビヴァレンス」と表現しており、彼は、その緊張はパーソンズの後の研究の中でも決して解決されることはなかったと述べている。その結果は、見事に定式化され、論理的な説得力があり、操作化や他の方法論的な変形への利用は容易だが、経験的な言及対象は影も形もない*先験的な*理論であった。

ここでの私の主眼点は、パーソンズとそれに続く世代の機能主義者たちは否定と抑圧にもとづく理論を生み出し、そうすることによって、デュルケムとウェーバーの反転したイメージを自分たちの論文の基礎をなすものとして生み出したということである。それゆえ機能主義と戦うことは社会学の古典、あるいは社会学一般と戦うことですらあるという印象が作られた。私の次の課題は、ガーフィンケルとエスノメソドロジストたちが、これらの反転したイメージが基礎になっている機能主義理論の同じ弱点の解決に取り組むことによって、いかに失われた古典のテーマを再生させたかを示すことである。

３．エスノメソドロジーによる再生

ガーフィンケルを、パーソンズによる分析的な理論化、そしてパーソンズの他の弟子や仲間たちから区別するものは、詳細さと*経験的な研究*への極端なまでの傾倒である。たとえば、家族構造を維持するにはどのような種類の規範的なネットワークが必要か、と問うよりも、むしろ「どんな規範的なネットワークが*あるのか*」、「何らかの規範的なネットワークは存在するのか」、「規範的なネットワークを私たちはどのようにして見てとることができるのか」、あるいは、「そもそも家族構造はどこにあるのか」とさえ、ガーフィンケルなら問うだろう。社会現象に対して、*見て理解しようとする*ガーフィンケルの態度は彼を顕著に経験的な社会学へと向かわせた。ただしその根底には常にパーソンズの理論があり、重要なパーソンズ的なテーマ、ほんのいくつか例を挙げると、社会構造、規範による指示、そして共有された理解、と関わっていたのである（Heritage 1984: 9を見よ）。ガーフィンケルの研究は、それ以前は探究されることのなかった「成員の方法」あるいは「技巧的な実践」と彼が呼ぶところの社会現象の領域へとガーフィンケルを導き（Garfinkel 1967: vii-ix, 31-34を見よ）、彼はその研究を、人々の技巧的な実践の学として名付けるために「エスノメソドロジー」という用語を作り出した（Garfinkel 1974を見よ）。概して、エスノメソドロジー的な研究は機能主義の前提と理論的な志向を捨て去っており、それらは人々に「本当の現実の社会」を、単なる先験的な理論化や形式的な研究方法によって成し

遂げられた結果としてよりも、「物事の具体性」の中に見えるようにするやり方を採るのである（Garfinkel 1988: 106）。この「物事の具体性」こそが、ガーフィンケルが目を向け、エスノメソドロジストがこれまで研究してきたことに他ならない。このように、エスノメソドロジーは自然科学の伝統における強い経験主義を採っているのである（Hilbert 1990b）。もし私たちが、科学としての社会学を経験主義の恩恵にあずかるものとして考えるならば、エスノメソドロジーもまた非常に社会学的なのである（Garfinkel 1988）。

このように、ガーフィンケルのテーマのルーツはパーソンズにあり、彼の方法についての研究は経験的なものである。彼が研究を始めたのは、理論的原則の妥当性を証明するためではないし、ましてやデュルケムとウェーバーを再生させるためでもない。にもかかわらず、ガーフィンケルは機能主義の誤りを正す中で、気づかれてはいないものの、そしてその形は変わってはいるものの、まさにパーソンズが積極的に抑圧した理論的テーマを再生したのである。

こうした再生の１つとして、デュルケム的な社会と道徳の等置がある。ここまで述べてきたように、デュルケムは経験的な社会を、事実的かつ道徳的なものとして、その産出と実在をそれ自体を超えた何かによって説明することはできない*独特*な単一の秩序として見ていた。パーソンズはその*独特*な秩序を、一方は事実的で、経験的で、調整されており、他方は規範的で、分析的に引き出され、調整しているというように、２つの部分に分けた。この説明では、規範と価値から構成される規範的秩序は、「外部」から事実的な秩序の原因となる。こうした配置の仕組みが、行為者の主観性からは独立した事実的な秩序の可能性それ自体や、規範的な秩序の可能性それ自体、そして後者が前者の原因になるという論理を含めて、ガーフィンケルの経験的な取り組みの格好の対象であった（Heritage 1984: 24-30）。ガーフィンケルの研究は道徳的な統制が、調整され、事実的なものとして産出されるまさにその秩序を構成する特徴であることを明らかにしており、これはデュルケムによる社会と道徳の等置と一致している。たとえば、規則の使用ということに関しては、規則はその同じ規則が規定的であり、説明的であるものとして行為者に想定されている場合でも、事実的なものとしての振る舞いの性質そのものに関わっている。このことは、特にウィーダー（1974）の社会復帰施設のエスノグラフィーの中でうまく論証されている。さらに、ガーフィンケル（1967: 68-70）は、道徳的な統制は、そうした規則があるということが行為者に想定されている時でさえ、全く規則の使用を伴う必要はないことを見いだしているし、一方、ビトナー（1967）も、いかに行為者が規則なしで秩序を抜け目なく産出したり調整したりできるかを明らかにしている（Garfinkel 1967: 18-24を参照）。

これらの事例のすべてにおいて、社会秩序による統制は、まさにその問題になっている秩序を構成する特徴になっている。場面がこのやり方を「自己組織化する」ということは、その道徳的次元と事実的次元の両方においてデュルケムの*独特*な秩序を強く想起させるものである。社会の成員の社会秩序についての記述、説明、一般的な物語をまさにその秩序の一部に含めることによって、ガーフィンケルは社会の*独特*な性質を「説明実践の『受肉化された』性質」（Garfinkel 1967: 1）、つまり、単一の自己生産的な秩序として復活させたのである。彼がこの現象全般に与えた名前が「相互反映性」（Garfinkel 1967: 7-11; 詳細はHilbert 1992: 38-45, 54-65を見よ）である。そして、エスノメソドロジーにとって、事実的な記述と道徳的な規定の間のあらゆる区別は、分析者の辞書から完全に消え去っている。

科学にとって自然に利用可能な、独立して存在する実態としての構造的な「事実的秩序」を拒否する中で、エスノメソドロジストは成員の主観的志向から独立した社会的組織の存在についてのウェーバーの懐疑、すなわち彼の物象化への警告も再生させたことに注意しよう。ウェーバーと結びつけられてはいないものの、この原則は、ジンマーマンとポルナー（1970）の「状況づけられたコーパス」論文において非常に力強く述べられており、メイナードとウィルソン（1980）によってよりはっきりと定式化された。組織化された活動についての信念一般を留保することは、単に「社会」の研究だけではなく、官僚制を含む、より小さな規模の社会組織の研究の中でも適用されてきた（Bittner 1965; Cicourel 1968; Cicourel and Kitsuse 1963; Hilbert 1987）。

しかし、もし社会と道徳を等置するデュルケムが正しいのであれば、エスノメソドロジーによる事実的秩序の拒絶は、等しく同様に規範的秩序の拒絶でもあるということになる。そして、これが実際、私たちが目にするところのものである。たとえばジンマーマンとウィーダー（1970）は、事実的秩序は規則と一致した秩序と変わるところがなく、つまり、まさにそれを認識することが規範的秩序を前提とするような秩序であること、そして、構造的なふるまいについての信念を留保することは必然的に、これら「２つ」の秩序の関係について多くの人が一般的に使っているどのような理論も含めて、構造を生み出す規則への信念を留保することであると明言している（詳細はHilbert 1992: 108-115を見よ）。とりわけ民間伝承を信じることと社会についての信念とをこのように留保することは、社会についての行為者の観念の内容の真正さについて、ウェーバーが表明した無関心を復活させるものでもある。

ガーフィンケルは、パーソンズが拒絶した別の重要なデュルケムによる等置、すなわち社会と客観的現実の等置も再生させた。一般的に、その原則は次のように述べることができるだろう。すなわち、有能な成員としての地位を維持するためにどのような活動が必要であろうと、また、何が社会秩序への「同調」に必要であろうと、その活動は世界が正しく、つまりその社会秩序の中で正しく経験されるために必要な実践そのものと等しい。デュルケムにとっての経験的な*独特の*秩序と、エスノメソドロジーにとっての相互反映的で自己組織的な成員性をめぐる活動は、知られており経験されているものとしての現実と同じであり、それを網羅している。言い換えれば、ある秩序の成員がどのような「現実」とぶつかり、何を「現実」として知るのかは、認識された社会秩序の可能性を提供する経験的な活動として、社会学にとって利用可能なのである。したがって、社会秩序をその秩序の内部から経験することは、その同じ調整された現実の内部から現実を経験することでもある。

社会と現実を等置するという原則は、ロサンゼルス自殺予防センターのメンバーが死の様態を調査し原因を究明する方法についてのガーフィンケル（1967: 11-18）の研究において最も説得的に論証されている。同じ原則は彼の陪審員についての研究でも働いている（Garfinkel 1967: 104-115）。これらの原則が自然科学の現実とも同様に関連しているというデュルケムの主張は、ガーフィンケル、リンチとリヴィングストン（1981）による天文学上の発見についての研究によって裏付けられているし、ポルナー（1987）はその洞察を世俗的な理論的関心の対象としての現実*それ自体*の分析も含むように拡張している（Gilbert and Mulkay 1984; Livingston 1986; Lynch 1982, 1985を参照。詳細はHilbert 1991; 1992: 66-82を

見よ)。これらの研究は行為者の主観性を、パーソンズ理論における心理生物学的、因果的な側面から救い出し、社会的に産出され調整されたものとして、そのデュルケム的地位を復活させていることに注意してほしい(Coulter 1979, 1989を参照)。

しかしながら、社会や主観的な経験に同調するために「どんなものが必要になるか」が、それ自体問題含みなのである。デュルケムにとって、文字通りの同調は理論的に不可能である。道徳的な安定性は、調整された儀礼の認識と犯罪の処罰を含む、儀礼的なアノミー防止実践を通じてのみ維持される。しかしパーソンズにとっては規範への文字通りの同調は、可能であるだけではなく、事実的な社会の産出にとって必要不可欠なのである(Wilson 1970を見よ)。そしてガーフィンケルにとっては、文字通りの同調は再度不可能なものとなっている。たとえば彼の「インデキシカル」という用語は、意味論的な表現と振る舞いの双方の性質を指し示しており、それらが具体的なコンテクストから形式的に切り離しがたいことを表わしている(Garfinkel 1967: 4-11)。それらは一般的な水準で、曖昧であり不正確である。この性質を「矯正不可能」と呼ぶ中で、ガーフィンケルは正確さを持って曖昧さをなくそうとする試みがそれ自体不正確であることを示している。それと全く同じ理屈で、コンテクストを「並べ上げること」も不可能であると言える。なぜなら、コンテクストそれ自体がインデキシカルだからである。そして、どのような２つの行為あるいは記述も、形式的な意味においては同一ではない。パターンとその例、規則と振る舞いの間のどんなつながりも、文字通りの意味での「一致」ではなく、技巧的な注解によって成り立っている。典型性は、その瞬間のために、そして究極的には成員性という実践的な目的のために、いまここでそれが認識される過程、そしていまここでそれが当面のところ説明可能となる過程で産出される典型性であるにとどまらざるをえない。

しかしこのことが、文脈を超越する文字通りの意味やふるまいがあるという成員の*理解*を崩壊させたりはしていないように思われる。この理解は実践的な行為にとって重要であり、また広く浸透している。しかし、ガーフィンケルによる「論証実験」のどれもが明らかにしているように、それは脆いものである。これらの実験には、あらかじめ考案した仮定にもとづいて、様々な状況で実験者がふつうではないふるまいをするものもあれば(たとえば Garfinkel 1967: 47-49)、どうにかして文字通りの明確さの水準に達するように実験者が被験者に要求するだけのものもある(たとえば Garfinkel 1967: 42-44)。これらの実験で秩序を回復するために被験者がよく用いる方法は、批難の意味で実験者を無視することや、何らかのラベリングを行うことである(Hilbert 1977を参照)。そのような儀礼は要するにアノミー防止の実践であり、デュルケムの言うところの犯罪認識儀礼に似ている。彼らは反対の証拠の存在に脅かされながらも、たとえば、意味論的な表現、ふるまいの同一性、生活の方式、規則などに文字どおりの「核となる意味」があるという印象を再生産し維持する。特に「医学部進学課程の学生」に対する実験のように(Garfinkel 1967: 58-65)、実験者がそのような儀礼による修復を防止できる場合には、被験者にもたらされるのは大きな社会的苦痛であり、これはまさに古典的なアノミー論によって仮定されていた「アノミア[訳注2)]」である(詳細はHilbert 1992: 46-56, 83-103を見よ; 1986も参照)。つまり、ここでもまたパーソンズが誘導していく中で抑圧され失われた古典のテーマが、ガーフィンケルの経験的研究によって期せずして再生されている。ちなみに、この特殊なテーマ、つまりアノミーと儀礼による修復というテーマは、マートンによる機能主義的なアノミー論に

おいて、さらに抑圧され、ほとんど跡形もなくなってしまった（Hilbert 1989）。

結局、エスノメソドロジーは、行為者の観念の内容にかかわらず行為者の主観性の基礎にある、普遍的な「心理学的な起源」とウェーバーが呼ぶところのものを再生させたのである。これらの起源は*社会的な実践*であり、「心理学的」とは誤った呼び方かもしれないが、変わらない実践を明らかにすることは、行為者自身の観点からかれらの観念の適切性を査定する必要性を未然に防ぐものである。全く反対に、パーソンズは、正当性と権威への主観的志向についてのウェーバーの理念型の棄却も含めて、至る所で、行為者の観念の完全さを評価していた。別のタイプに含まれる要素を持たなければ理念型は完全なものにならないと彼は結論づけていた。結果として、たとえば合理性がカリスマを含むように、理念型はお互いの性質を帯びることになり、「純粋」なものとしての方法論的な立場を失っているのである（Parsons 1968: 665）。しかしポルナー（1987）が示したように、合理性を維持することに関わる実践は、宗教的な信念を維持することに関わる実践と全く違いはない。したがって、ある形態の観念は、別の形態の観念の中にその「根拠」を見いだす必要はなく、むしろその性質において特に*観念的ではない*経験的な社会実践の中にその「根拠」を見いだす必要がある。これはたとえば合理性の根拠が、カリスマ的な志向性の中、あるいは近年、シーカ（1988）が示唆しているように非合理性の中にあると言うのとは全く異なる。したがってパーソンズの「純粋合理性」についての批判は、議論の余地のあるものであり、とどまるところのない合理化は、未決の問題のままなのである。実際、エスノメソドロジー的な研究の中には、まさにそのようなウェーバー的な現象に経験的に言及しているものもある（Hilbert 1981, 1982, 1987）。会話の文字通りの解釈を産出することを依頼された対象者が、潜在的に終わりのない課題に従事したのとほぼ同じ理由で、合理化と官僚化には終わりがないのである（Garfinkel 1967: 25-31; Hilbert 1992: 152-160を見よ）。

これらはパーソンズによって葬られ、ガーフィンケルとエスノメソドロジーによって再生させられた古典のテーマのうちのほんのいくつかに過ぎない。合計すれば、そのようなテーマはおよそ20はある（Hilbert 1992）。さらに、抑圧されたテーマが復活したというこのドラマは、収斂説にまで広がっていく。すなわち、パーソンズが考えたのとは異なる形で、デュルケムとウェーバーは収斂するのである。そして収斂の新たな理解は、古典の理論、エスノメソドロジー、社会の一般的な性質と特徴に新しい光を当てる「古典の知見に学ぶエスノメソドロジー理論」を帰結する（要約はHilbert 1992: 162-165を見よ）。

ここでもまた、私がこのように歴史的なつながりを描き出すことは、古典の文献の本当の意味を発見したり、その著者の意図を正確に述べたり、そうしなければ種類の異なる諸理論を統合することとは、区別されなければならない。たとえば私は、ウェーバーがエスノメソドロジストであるとか、ガーフィンケルがひそかなデュルケム主義者であるといった主張をしているのではない。たしかにデュルケムとウェーバーは私が提起した論点よりも多くのことを社会について述べており、同じことはエスノメソドロジーについても言える。にもかかわらず、エスノメソドロジーは社会学理論の進歩の中で大部分忘れられてしまい、そのうちのいくつかは著者自身によっても十分に探究されなかった、いくつかの重要な古典のテーマに立脚している。これらのテーマはパーソンズが抑圧したのと同じテーマであり、それらはエスノメソドロジーがその抑圧に基づいたパーソンズの考えに取り組むまさにその中で再度現れたものである。たしかに、エスノメソドロジーはこうした古典

の考えを、デュルケムやウェーバーが想像することもできなかった方向へと発展させた。しかし古典とエスノメソドロジーのテーマの間のほとんど一対一の共通基盤を持つつながりは、デュルケム、ウェーバー、そしてガーフィンケルがこれらのつながりについて何を言うかとは関係なく、歴史的な過程の中に位置づけられるのである。こうした考えが科学的に*正しい*か否かということと、エスノメソドロジーを古典の考えの経験的検証と見なすことが適切であるかどうかということとは、全く異なる問いであり、その問いは、ガーフィンケルの経験主義の性質と同様に、デュルケムとウェーバーの洞察の性質にも向けられるものである。しかしながら、私は古典の理論とエスノメソドロジーの双方はとても洗練されたものと思うし、それらの間の連続性を驚きの源泉として、そして現代の社会学理論のパラドックスの多くを解決するための基盤と見なしている。

4.「伝統的社会学」へのエスノメソドロジー的批判の帰結：合理主義的民間科学としての機能主義

初期エスノメソドロジストが「伝統的社会学」をそれが研究しているはずの文化に土着化していると、つまり、それが研究しているはずのもののただの一例となっていると批判したときに（Zimmerman and Pollner 1970; Zimmerman and Wieder 1970を見よ）、その批判はエスノメソドロジー以前のすべての形態の社会学と社会のすべての実例に拡張されると一般的には考えられていた。しかし、先述したダイナミクスを踏まえれば、いまやわれわれはこの初期の批判を和らげることができる。つまり、「伝統的社会学」とはアメリカ的機能主義であり、それが「土着化」した社会とは現代西洋社会である。既に示唆しておいたように、エスノメソドロジー以前のすべての社会学が機能主義の弱点を共有しているわけではない。加えて、すべての社会が規則に支配された行動についての民間伝承を含んでいるわけではない。実際、規則に支配された行動というこの考え方は、ウェーバーの３つの理念型のうちの１つに過ぎない合理－合法的と彼が呼んだ主観的志向に主には基づくものである。したがって、エスノメソドロジーの古典的なルーツと結びつけるならば、機能主義を西洋社会の一例と見なすことは、それをデュルケムとウェーバーが一般的には彼らの社会の研究において、より特定的には西洋社会の研究においてまさに論じた現象の一例と見なすことなのである。言い換えれば、いまやわれわれは機能主義的な理論を、ミニチュア化された合理的な社会の要約版、ボトルの中の西洋社会、それが報告をしているとされる社会の明解な一例としてエスノグラフィー的に見ることができる（Hilbert 1992: 165-171）。

本質的に私たちはパーソンズを、社会についての行為者の考えに対するウェーバー的な無関心を採用するどころか、行為者の考えの１つを彼自身の社会学の中に積極的に取り込んだと見なしている。パーソンズが社会学の古典の検討をする直前に（Parsons 1968: 43-46）、『社会的行為の構造』の中ではじめて展開した、彼の理論化以前の前提は、ウェーバー（1978: 24-26）が合理的な主観的志向と表現したものとほとんど同じ用語で表現されている。パーソンズの観点からは、功利主義者が集合的な行為の概念を排除するまでに個人主義にすっかりまみれた行為の「常識」を受け継いでいるのと同様に、パーソンズは社会の経験的な研究を排除するまでに合理性にすっかりまみれた集合的な行為の常識版を同じように受け継いでいた。このことはパーソンズが、合理性を社会の特徴として位置づけていたとか、行為者自身が合理的であることをパーソンズが必要としていたということを意味

するのではなく、合理性はパーソンズの理論化それ自体の特徴であるということを意味している（Heritage 1984: 24-27を参照）。

したがって、機能主義者はふつうの合理的な行為者と同じようなやり方で（たとえば官僚制のような）社会組織に志向する（Bittner 1965を見よ）。実際、彼らが規範を原因として行動が構造化されたものとして社会を表現することが、非常に大きな巨大官僚制としての社会のモデルになっている。言い換えれば、機能主義者は西洋の合理的な社会組織に特有の主観的志向を採用して、それをたとえば*理論的対象としての社会*といった社会一般の科学的説明に無理矢理利用しているのである。規模の小さな場合で言えば、このような指し手については以前にも言及されている。公式の規則では観察された行動を適切に説明できないような官僚制の研究においては、分析者の中には「非公式の規則」という考え方を用いるものがあり、機能主義理論によれば、それは官僚による公式の規則の機能についての想定と同じように機能する（Bittner 1965; Hilbert 1987を見よ）。同様に社会学者も、機能主義的モデルを前提としていれば、たとえそもそも公式の規則がない場合でさえも、そのように機能する規則を発見することができる（Hilbert 1981）。そして規模の大きな場合で言えば、機能主義的前提を備えた社会学者は、その成員が規則に従った行動など一度も考えたことがない非合理的社会も含めて、どんな社会に入りこんでも、事実的な社会構造だけではなく事実的な社会構造を生み出す規範的秩序、つまり、内面化された疑似官僚制的な*方針*という文化を発見することができる（Hilbert 1992: 165-169）。

パーソンズ理論が、純粋合理性の分析的な不可能性を主張していながら、いまやパーソンズ理論がまさにその現象の実例として現れているというのは皮肉なことである。このこともやはり、社会的行為者自身あるいは規範自体が必然的に合理的であるとか、行為者は合理的な形で規範に志向しているとパーソンズが考えていたということではない。実際パーソンズは、決定的に非合理的な様々な種類の社会や社会的行為を説明しなければならず、そして彼は、合理性それ自体をカリスマの要素が含まれるものとして見ていた。たとえば行為の目的である価値は、合理的な手段を通じて行為者によって獲得されうるものではない。このことは、「純粋合理性」に関するパーソンズの批判の１つの軸である。しかし社会的行為者にとって非合理的であるものが、にもかかわらず、社会システムを広く行き渡った規範と価値の帰結と見なす機能主義者自身にとっては合理的になる。言い換えれば、合理的に働く機能主義的な文化のモデルは、それが「制度化された誤り」を含んでいる場合であっても、秩序を産出するのである（Heritage 1984: 27-30）。それゆえ、ここで合理性と私が言っていることは、機能主義的な観察者の主観的志向の特徴であり、必ずしもその行為者や、行為者がその中へと社会化される規範的な枠組みの特徴ではない。

５．機能主義的合理化とアノミー防止儀礼

パーソンズが外的な規範による統制という考え方を正当化する根拠をデュルケムの集合意識にそもそも見出していたので、そして、彼が集合意識の指示的な内容について議論していたので、私たちは機能主義が主張していることを*集合意識の合理化*と見なすことができる。集合意識を規範と価値に変換することは、それが安定的な集合的行動として規定しているものからのその独自性ともあいまって、合法的な志向を充分に表現している。しかし、デュルケムが社会と道徳を等置しているということに照らすならば、道徳の合理化は

*独特*の社会であるところの事実的行動の合理化と一致する。したがって、この同一の秩序の合理化が機能主義者にとっては、対応する事実的秩序に見出されるのとちょうど同じ程度に展開する複雑性を予測し規定する、より複雑な規範的秩序を生み出し続けることになる。どのような複雑性が事実的社会に発見されようとも、対応する複雑な規範的秩序の中に、それを説明するために必要なものは何でも発見できることを機能主義者は保証されている。このことは、インクのしみの形がその輪郭を取り囲む白い部分の対応する形によって説明できるのとほぼ同じ理由によるものである（Wittgenstein 1953: 85）。

ウェーバーが述べているように、合理化は競合する観念の様式に影響を受けないため、妥協を知らない。合理化に関する経験的な研究が述べているように（Hilbert 1987）、合理的な行為者は自分たちの計画がいまだに合理性の基準に達しておらず、そして実際、合理化が必要な新しい非公式なやり方といい加減さを産み出した（あるいは「そのことが明らかになった」）ことを、永遠に示し続けることができるのである。この意味で合理化は合理化を生む。ガーフィンケル（1967: 26）が似たような実験に関して、そのことを表現している言葉を借りれば、「課題を達成するまさにそのやり方がその特徴を増幅させた」のである。

この言葉は機能主義的な理論化のあり様を完璧に言い当てている。「規範が秩序の原因になる」という単純な図式として始まったものが、互いに交差し制限し制約する極めて複雑なシステムのネットワークへとすぐに増殖した（Parsons 1951; Parsons *et al.* 1951; Parsons, Bales and Shils 1953; Lackey 1987; Hilbert 1992: 172-173）。合理化計画の１つの糸を、機能主義的な役割理論の展開の中にたどることができる。「役割」は部分的には、単独の指示的な秩序から生じうる行動のヴァリエーションを説明するために生まれた。地位カテゴリーの内部の行動でさえまだヴァリエーションを示すので、この概念は失敗した。そこでマートン（1957, 1968）は、これらの非常に詳細で複雑なヴァリエーションについての理解が進んだことに対処するために、「役割群」と「地位群」という用語を新しく作った。このことは、役割群と地位群の双方が互いに潜在的な葛藤関係にあることをマートンが見出したため、新たな問題を生んだ。そこで登場したのが、潜在的な葛藤を縮減し、文化的な指示を可能にするマートンが言うところの「社会的メカニズム」（Merton 1957: 113-117; 1968: 425-433）である（詳細はHilbert 1990a; 1992: 174-181を参照）。このメカニズムの問題は、コーザー（1990）にメカニズムが作動するための「構造要件」を提案させた。要するに、合理化は潜在的には終わりのない計画なのである。

もし機能主義的な理論がウェーバーの合理化の一例であるとするなら、それは、デュルケムによって前提とされていた重要な特徴、すなわちアノミーを防ぐものとしての儀礼的な修復と「犯罪」認識の必要性も示している。皮肉にもマートン（1968: 185-214）はデュルケムの影響力の大きい用語であるアノミーを、単にこれらの目的のためだけに流用していた。デュルケムにとって犯罪の認識はアノミー防止儀礼である一方、マートンにとってアノミーとは、逸脱を*引き起こす*規範的秩序の崩壊（手段と目的の分離）である。言い換えれば、儀礼的なラベリングの実践はデュルケムの逸脱理論の焦点であったが、マートンは客観的な非同調のカテゴリーとしての逸脱を自明視していた。つまり事実上、マートン自身がそれにラベリングをしているのである。マートンはこのように主張することで、規則に基づいた同調という彼にとって不可欠な考え方を用いることができた。単に*どんな*行為でも同調として見なされるわけではない。それと同時に、認識された違反は、*それが違*

反であるにもかかわらず、今や単に同調を規定するだけではなく、その違反自身さえも規定する規範的な秩序の証拠として取り扱われる。つまり、逸脱はそれが違反しているとされる秩序の証拠であると見なされるのである（Bittner 1967; Hilbert 1977; Pollner 1987; Zimmerman 1970, 1974を参照）。そうした但し書きなしでは、機能主義的な理論はそれ自身の用語の内部と、機能主義者自身にとって、必然的に色あせ、アノミー的な矛盾へと陥ってしまうというのが私の主張である。もし機能主義者が、経験的なふるまいと文字通りの機能主義的なモデルとの間の、進行中の不一致に直面した時に、単に全てのことは「とにかく」同調している、すなわち何も逸脱としては見なせないと主張するならば、その背後で作動しているモデルがありうるという印象は、科学が潜在的に発見可能なものとしては無限に維持することはできない。いわばそれは不毛なものとなってしまう（詳細はHilbert 1992: 181-187を見よ）。

これらの考察は、スペクターとキツセ（1977）による機能主義的な社会問題論についての分析と類似している。エスノメソドロジーによる洞察に多くを負っている彼らが代わりに推奨するのは、客観的な社会秩序（機能主義的システム）もそこで生じる異常（機能主義的な社会問題と逸脱）も客観的に「そこにある」現象として扱わないことである。人々が社会問題の改善策や治療法について議論し、その準備をするだけではなく、社会問題を発見し、認識し、自明視し、記述し、定義し、診断し、分析し、一言で言えば構成する観察可能なプロセスを明らかにするために、構造化された社会秩序（Zimmerman and Wieder 1970; Zimmerman and Pollner 1970）と社会問題の両方についての信念を停止することが勧められている。この研究目標は、社会学を経験的な人間の活動における社会問題の起源へと差し向けるものである。このように考えてみれば、成員の「クレイム申し立て活動」は、道徳的秩序を物象化する問題認識のためのデュルケム的な儀礼となる。それらは確証的な証拠がなくても、客観的な社会秩序が存在するように見せるための仕掛けなのである。

したがって、社会秩序を客観的に構造化され規定されたものとして自明視するパーソンズ的な機能主義者たちが、社会学的探求のトピックとして、客観的な逸脱と社会的な無秩序にすぐに目を向けたのは偶然ではない。彼らは、まさに自分たちが前提としている社会秩序が体裁を保つためのこうした仕掛けを、デュルケムが予言していた通りの理由で必要とした。そうした仕掛けは、それらについての理論化と同様、それを通じて集合的な道徳の命が保たれる儀礼的な実践である。機能主義的な生きられた世界の中では、これらの儀礼的な修復実践が、機能主義者たちが前提としているものの実存を維持することを、彼らに可能にしている。マートンの理論化はこうした儀礼的なクレイム申し立て実践の経験的な事例なのである（Hilbert 1989; 1992: 181-187を見よ）。

6．結論

本論文で、私はエスノメソドロジーが社会学の古典にその歴史的な出自を主張できると論じてきた。これは古典の考え方とエスノメソドロジーの考え方が同じであるという意味ではなく、むしろエスノメソドロジストたちは、古典的な理論家たちの想像以上に、具体的な経験主義の信条に合致した方法でそのテーマを追求し発展させることで、古典のテーマを継承したという意味である。また、私は歴史的な連続性を明らかにすることは、単なる無益な学問的訓練ではなく、社会と成員の民間伝承に関する、エスノメソドロジーによ

る理解と、一般的な社会学による理解の両方にとって生産的でありうるとも論じてきた。エスノメソドロジーが「伝統的社会学」を民間科学として批判してきたことを拡張してとらえれば、たとえば、私たちはアメリカ的な機能主義をデュルケムとウェーバーが論じたり予知したりしていた現象の一例として見ることができる。実際、遠回しではあっても、デュルケムとウェーバーはアメリカ的な機能主義の没落を予測していたとまでは言えないかもしれないが、その興隆は予測していたと言ってもよいだろう。

注

1）本稿は、1992年８月にマサチューセッツ州ウォルサムで、国際エスノメソドロジー会話分析学会の主催で行われた「エスノメソドロジー：25周年」という会議で発表された。

文献

Alexander, J.C., *Theoretical Logic in Sociology,* Volume 2: *The Antimonies of Classical Thought: Marx and Durkheim*. Berkeley: University of California Press, 1982.

Alexander, J.C., *Theoretical Logic in Sociology,* Volume 4: *The Modern Reconstruction of Classical Thought: Talcott Parsons*. Berkeley: University of California Press, 1984.

Alexander, J.C., "The centrality of the classics," In A. Giddens and J. H. Turner (Eds.), *Social Theory Today,* Stanford: Stanford University Press, 1987, pp. 11–57.

Bershady, H., *Ideology and Social Knowledge*. New York: Wiley, 1973.

Bittner, E., "The concept of organization," *Social Research*, 32, 1965, pp. 239–255.

Bittner, E., "The police on skid-row: A study in peace keeping," *American Sociological Review*, 32, 1967, pp. 699–715.

Bloor, D., *Knowledge and Social Imagery*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1976.（＝佐々木力・古川安訳『数学の社会学―知識と社会表象』培風館、1985）。

Cicourel, A.V., *The Social Organization of Juvenile Justice*. New York: Wiley, 1968.

Cicourel, A.V. and J. l. Kitsuse, *The Educational Decision Makers*. New York: Bobbs Merrill, 1963.（＝山村賢明・瀬戸知也（訳）『だれが進学を決定するか―選別機関としての学校』金子書房、1985）。

Cohen, J., L. E. Hazelrigg, and W. Pope, "De-Parsonizing Weber: A critique of Parsons' interpretation of Weber's sociology," *American Sociological Review*, 40, 1975, pp. 229–241.

Collins, R., *Max Weber: A Skeleton Key*. Beverly Hills: Sage, 1986.（＝寺田篤弘・中西茂行（訳）『マックス・ウェーバーを解く―A skeleton key』新泉社、1988）。

Coser, L., *Masters of Sociological Thought*. New York: The Free Press, 1971.

Coser, L., "The uses of classical sociological theory," In B. Rhea (Ed.), *The Future of Sociological Classics*. London: George Allen and Unwin, 1981, pp. 170–182.

Coser, R.L., "Reflections on Merton's role-set theory," In J. Clark, S. Modgil and C. Modgil (Eds.), *Robert K. Merton: Consensus and Controversy*. Sussex, UK: Falmer Press, 1990, pp. 159–174.

Coulter, J., *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*. New York: Rowman, 1979.（＝西阪仰（訳）『心の社会的構成―ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社、1998）。

Coulter, J., *Mind in Action*. Atlantic Highlands, NJ: Humanities Press International, 1989.

Durkheim, E., *The Division of Labor in Society*. Glencoe, 1L: The Free Press, 1933 [1893].（＝田原音和（訳）『社会分業論』青木書店、1971）。

Durkheim, E., *The Rules of Sociological Method*. New York: The Free Press, 1938 [1895].（＝宮島喬（訳）『社会学的方法の規準』岩波書店、1978）。

Durkheim, E., *The Elementary Forms of the Religious Life*. Glencoe, IL: The Free Press, 1947 [1912].（＝山崎亮（訳）『宗教生活の基本形態―オーストラリアにおけるトーテム体系』ちくま学芸文庫、2014）。

Fine, G.A. and S. Kleinman, "Interpreting the sociological classics: Can there be a 'true' meaning of Mead?," *Symbolic Interaction*, 9, 1986, pp. 129–146.

Garfinkel, H., *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1967.

Garfinkel, H., "The origins of the term 'Ethnomethodology'," In R. Turner (Ed.), *Ethnomethodology*. Baltimore: Penguin, 1974, pp. 15–18.（＝山田富秋・好井裕明・山崎敬一（編訳）『エスノメソドロジー―社会学的思考の解体』せりか書房、1987、9頁–18頁）。

Garfinkel, H., "Evidence for locally produced, naturally accountable phenomena of order*, logic, reason, meaning, method, etc. In and as of the essential quiddity of immortal ordinary society; (I of IV): An announcement of studies," *Sociological Theory,* 6, 1988, pp. 103–109.

Garfinkel, H., M. Lynch, and E. Livingston, "The work of a discovering science construed with materials from the optically discovered pulsar," *Philosophy of the Social Sciences,* 11, 1981, pp. 131–158.

Giddens, A., *Capitalism and Modern Social Theory: An Analysis of the Writings of Marx, Durkheim, and Max Weber*. New York: Cambridge University Press, 1971.（＝犬塚先（訳）『資本主義と近代社会理論―マルクス、デュルケム、ウェーバーの研究』研究社出版、1974）。

Gilbert, G.N. and M. Mulkay, *Opening Pandora's Box: An Analysis of Scientists' Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press, 1984.（＝柴田幸雄・岩坪紹夫（訳）『科学理論の現象学』紀伊國屋書店、1990）。

Hekman, S.J., *Weber, the Ideal Type, and Contemporary Social Theory*. Notre Dame, IN: University of Notre Dame Press, 1983.

Heritage, J.C., *Garfinkel and Ethnomethodology*. Cambridge: Polity Press, 1984.

Hilbert, R.A., "Approaching reason's edge: 'Nonsense' as the final solution to the problem of meaning," *Sociological Inquiry,* 47, 1977, pp. 25–31.

Hilbert, R.A., "Toward an improved understanding of 'Role'," *Theory and Society,* 10, 1981, pp. 207–226.

Hilbert, R.A., "Competency-based teacher education versus the real world: Some natural limitations to bureaucratic reform," *Urban Education,* 16, 1982, pp. 379–398.

Hilbert, R.A., "Anomie and the moral regulation of reality: The Durkheimian tradition in modern relief," *Sociological Theory,* 4, 1986, pp. 1–19.

Hilbert, R.A., "Bureaucracy as belief, rationalization as repair: Max Weber in a postfunctionalist age," *Sociological Theory,* 5, 1987, pp. 70–86.

Hilbert, R.A., "Durkheim and Merton on anomie: An unexplored contrast and its derivatives," *Social Problems,* 36, 1989, pp. 242–250.

Hilbert, R.A., "Merton's theory of role-sets and status-sets," In J. Clark, S. Modgil and C. Modgil (Eds), *Robert K. Merton: Consensus and Controversy*. Sussex, UK: Falmer Press, 1990a, pp. 177–186.

Hilbert, R.A., "Ethnomethodology and the micro-macro order," *American Sociological Review,* 55, 1990b,

pp. 794–808.

Hilbert, R.A., "Ethnomethodological recovery of Durkheim," *Sociological Perspectives,* 34, 1991, pp. 337–357.

Hilbert, R.A., *The Classical Roots of Ethnomethodology: Durkheim, Weber, and Garfinkel*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1992.

Jones, R.A., "On understanding a sociological classic," *American Journal of Sociology,* 83, 1977, pp. 279–319.

Lackey, P.N., *Invitation to Talcott Parsons' Theory*. Houston: Cap and Gown Press, 1987.

Livingston, E., *The Ethnomethodological Foundations of Mathematics*. London: Routledge and Kegan Paul, 1986.

Lukes, S., *Emile Durkheim: His Life and Work*. New York: Harper and Row, 1972.

Lynch, M., "Technical work and critical inquiry: Investigations in a scientific laboratory," *Social Studies of Science,* 12, 1982, pp. 499–534.

Lynch, M., *Art and Artifact in Laboratory Science: A Study of Shop Work and Shop Talk in a Research Laboratory*. London: Routledge and Kegan Paul, 1985.

Maynard, D.W. and S. B. Clayman, "The diversity of ethnomethodology," *Annual Review of Sociology,* 17, 1991, pp. 385–418.

Maynard, D.W. and T. P. Wilson, "On the reification of social structure," *Current Perspectives in Social Theory,* 1, 1980, pp. 287–322.

Mehan, H. and H. Wood, *The Reality of Ethnomethodology*. New York: Wiley, 1975.

Merton, R.K., "The role-set: Problems in sociological theory," *British Journal of Sociology,* 8(2), 1957, pp. 106–120.

Merton, R.K., *Social Theory and Social Structure*. New York: The Free Press, 1968 [1949].（＝森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎（訳）『社会理論と社会構造』みすず書房、1961）。

Parsons, T., *The Social System*. New York: The Free Press, 1951.（＝佐藤勉（訳）『社会体系論』青木書店、1974）。

Parsons, T., *The Structure of Social Action*. New York: The Free Press, 1968 [1937].（＝稲上毅・厚東洋輔（訳）『社会的行為の構造』木鐸社、1974～1989）。

Parsons, T. et al., *Toward a General Theory of Action*. New York: Harper and Row, 1951.（＝永井道雄・作田啓一・橋本真（訳）『行為の総合理論をめざして』日本評論新社、1960）。

Parsons, T., R. E. Bales and E. A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*. New York: The Free Press, 1953.

Pollner, M., *Mundane Reason: Reality in Everyday and Sociological Discourse*. New York: Cambridge University Press, 1987.

Pope, W., "Classic on classic: Parsons' interpretation of Durkheim," *American Sociological Review,* 38, 1973, pp. 399–415.

Pope, W., J. Cohen and L. E. Hazelrigg, "On the divergence of Weber and Durkheim: A critique of Parsons' convergence theory," *American Sociological Review,* 40, 1975, pp. 417–427.

Sica, A., *Weber, Irrationality, and Social order*. Berkeley: University of California Press, 1988.

Spector, M. and J. I. Kitsuse, *Constructing Social Problems*. Menlo Park, CA: Cummings, 1977.（＝村上直

之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太（訳）『社会問題の構築―ラベリング理論をこえて』マルジュ社、1990）。

Stone, G.P. and H. A. Farberman, "On the edge of rapprochement: Was Durkheim moving toward the perspective of symbolic interaction?," In G. P. Stone and H. A. Farberman (Eds.), *Social Psychology through Symbolic Interaction*. Waltham, MA: Ginn-Blaisdell, 1970, pp. 100-112.

Watson, R., "The understanding of language in everyday life: Is there a common ground?," In G. Watson and R. M. Seller (Eds.), *Text in Context: Contributions to Ethnomethodology*. Newbury Park, CA: Sage, 1992, pp. 1-19.

Weber, M., *The Methodology of the Social Sciences*. E. A. Shils and H. A. Finch (Trans. and Eds.), Glencoe, IL: The Free Press, 1949 [1903-1917].（＝富永祐治・立野保男（訳）折原浩（補訳）『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫、1998）。

Weber, M., *Economy and Society*. E. Fischoff et al. (Trans.), Berkeley: University of California Press, 1978 [1921].

Wieder, D.L., *Language and Social Reality: The Case of Telling the Convict Code*. The Hague: Mouton, 1974.

Wilson, T.P., "Conceptions of interaction and forms of sociological explanation," *American Sociological Review,* 35, 1970, pp. 697-710.

Wilson, T.E. and D. H. Zimmerman, "Ethnomethodology, sociology and theory," *Humboldt Journal of Social Relations,* 7, 1979/80, pp. 52-88.

Wittgenstein, L. *Philosophical Investigations*. New York: Macmillan, 1953.（＝藤本隆志（訳）『ウィトゲンシュタイン全集8 哲学探究』大修館書店、1976）。

Zimmerman, D.H., "The practicalities of rule use," In J. D. Douglas (Ed.), *Understanding Everyday Life*. Chicago: Aldine, 1970, pp. 221-238.

Zimmerman, D.H., "Fact as a practical accomplishment," In R. Turner (Ed.), *Ethnomethodology*. Baltimore: Penguin, 1974, pp. 128-143.

Zimmerman, D.H. and M. Pollner, "The everyday world as a phenomenon," In J. D. Douglas (Ed.), *Understanding Everyday Life*. Chicago: Aldine, 1970, pp. 80-103.

Zimmerman, D.H. and D. Wieder, "Ethnomethodology and the problem of order: Comment on Denzin," In J. D. Douglas (Ed.), *Understanding Everyday Life*. Chicago: Aldine, 1970, pp. 285-295.

訳注

１）以下、classical sociologyを「社会学の古典」と訳した。

２）ロバート・K・マートン（1964）はレオ・スロール（1956）を参照しながら、社会システムの状態を指す「アノミー」に対して、「アノミア」を個人の状態を指し示す概念として用いており、ヒルバートがここで述べている「アノミア」もこの区分に沿ったものと考えられる。

解題

本稿は、Richard A. Hilbert, "Garfinkel's recovery of themes in classical sociology", *Human Studies*, 18, 1995, pp. 157-175.（Michael Lynch and Wes Sharrock (Eds.), *SAGE Masters of Modern Social Thought,* Volume 1: *Harold Garfinkel*. London: SAGE Publications Ltd, 2004, pp. 177-193. に再録）の全訳である。著者のリチャード・A・ヒルバートは、1974年にカリ

フォルニア大学サンタバーバラ校社会学部で修士号を、1978年に同校で博士号を取得した。1978年からガスタバス・アドルファス大学社会学・人類学部で教鞭を取り、現在は同大学の名誉教授である。ヒルバートには多くの研究業績があるが、その代表作は、1992年にノースカロライナ大学出版より刊行された単著、『エスノメソドロジーの古典的なルーツ―デュルケム、ウェーバー、ガーフィンケル』である（Hilbert 1992）。そして本稿の原典は、単著が出版された1992年に行なわれた講演に基づいており、その内容は単著のエッセンスをまとめたものである。

本稿におけるヒルバートの議論を簡潔に述べれば以下の通りである。エスノメソドロジーは時に、それ以前の全ての社会学と対立するものとして受け取られてしまう（あるいは自らもそのように提示する）ことがあるが、それは誤りである。そのようなイメージは、ハロルド・ガーフィンケルがエスノメソドロジーを生み出すにあたって、当時、主流の社会学であったタルコット・パーソンズの機能主義を乗り越えようとしていたことに起因する。たしかにパーソンズの機能主義は、理論構築の過程においてエミール・デュルケムとマックス・ウェーバーをその源泉としている。それゆえエスノメソドロジーがパーソンズの機能主義を批判している時、エスノメソドロジーは同じ種類の批判をデュルケム、ウェーバーにも向けていると思われるかもしれない。しかしながらパーソンズの機能主義は、「社会と道徳の等値」というデュルケムのテーゼや、ウェーバーによる「物象化の拒否」など、その多くの重要な主張を否定あるいは無視することによって成立していた。このためパーソンズを乗り越えることによってガーフィンケルが生み出したエスノメソドロジーは、図らずも、パーソンズが否定あるいは無視したデュルケムやウェーバーの主張を、経験的な形で再生することに成功しているのである。それゆえエスノメソドロジーのルーツは、デュルケムやウェーバーにこそあり、その意味でエスノメソドロジーは正統な社会学の伝統の中に位置づけられるのである。

こうしたヒルバートの主張がどの程度まで妥当なものであるかを判断することは、正直なところ訳者の能力を超えており、読者諸氏に委ねたい。実際、ハーヴィー・サックスは1963年の「社会学的記述」という論文の中で、ウェーバーとデュルケムの社会学的方法論を強く批判し、社会学の正しい記述のあり方を主張していた（Sacks 1963＝2013）。そしてそこでの構想が、後にエスノメソドロジーの経験的プログラムであるところの会話分析として結実したことは周知の通りである（Sacks 1992）。ただし、こうしたサックスの主張の一方で、ガーフィンケル自身は1996年の雑誌論文、そして2002年の書籍の中で、デュルケムの見解とエスノメソドロジーとの連続性を主張している（Garfinkel 1996; 2002）。本邦では佐藤慶幸がその著書『デュルケムとウェーバーの現在』において、1992年のヒルバートの単著の内容を紹介するために２つの章を割いている（佐藤 1998）。近年においても、高橋章子（2009）がデュルケムについて、佐々木啓と田上大輔（2015）がウェーバーについて、パーソンズにおいては取り込まれなかった論点が、ガーフィンケルによって蘇らされていることを、ヒルバートの議論も参照しながら明らかにしている。以上を踏まえると、ヒルバートの主張は今もなお傾聴に値すると考えられる。

エスノメソドロジーがその研究の意義を示すために、様々なフィールドにおける人々の実践を分析し、その知見を現場に還元するという方向があり、日本でも多くの優れた研究が生まれている（前田・水川・岡田 2007；西阪・早野・須永・黒嶋・岩田 2013；西阪・高

木・川島 2008)。その一方で、エスノメソドロジーが社会学の伝統の中に明確に位置づけられることを主張する本稿は、エスノメソドロジーがその研究の意義を提示するもう一つの方向性を、私たちに示しているように思われる。

本稿の訳出にあたっては、日本語として不自然な表現にならないように注意をしながらも、できる限り原典に忠実な訳を心がけた。ただし原文中で言及されている文献表記の明らかな間違いは、特に注記をせずに修正している箇所がある。また文献リストの表記法も本誌の執筆要領に従い修正した。なお本稿の翻訳は訳者が共同で行ない、解題は中川が単独で担当した。

本稿完成に至るまでに、川島理恵氏（関西外国語大学短期大学部）には、訳文のチェックに加えて、著者に翻訳公刊の了解を得るための仲介をしていただいた。また黒嶋智美氏（日本学術振興会・千葉大学）からは、出版社から翻訳の著作権許諾を得るために多くのアドバイスを頂戴した。記して感謝したい。無論、翻訳上の誤りは全て訳者に帰す。

文献（訳注・解題）

Garfinkel, H., “Ethnomethodology’s program,” *Social Psychology Quarterly,* 59(1): 1996, pp. 5-21.

Garfinkel, H., *Ethnomethodology’s Program: Working out Durkheim’s Aphorism*. New York: Rowman & Littlefield Publishers, 2002.

Hilbert, R.A., *The Classical Roots of Ethnomethodology: Durkheim, Weber, and Garfinkel*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1992.

前田泰樹・水川喜文・岡田光弘（編）『エスノメソドロジー―人々の実践から学ぶ』新曜社、2007。

Merton, R.K., “Anomie, anomia, and social interaction,” In M. B. Clinard. (Ed.), *Anomie and Deviant Behavior: Discussion and Critique*. NY: The Free Press of Glencoe, 1964, pp. 213-242.

西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂『共感の技法―福島県における足湯ボランティアの会話分析』勁草書房、2013。

西阪仰・高木智世・川島理恵『テクノソサエティの現在３　女性医療の会話分析』文化書房博文社、2008。

Sacks, H., “Sociological description”, *Berkeley Journal of Sociology*, 8, 1963, pp. 1-16.（＝南保輔・海老田大五朗（訳）「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』24、2013、77頁-92頁）。

Srole, L., “Social integration and certain corollaries: An exploratory study,” *American Sociological Review,* 21(6), 1956, pp. 709-716.

Sacks, H., *Lectures on Conversation*, 2vols. Cambridge: Blackwell, 1992.

佐々木啓・田上大輔「〈秩序〉と〈規範〉をめぐる一考察―エスノメソドロジーとヴェーバー社会学の視点から」『年報社会学論集』28、2015、100頁-111頁。

佐藤慶幸『デュルケムとウェーバーの現在』早稲田大学出版部、1998。

髙橋章子「相互行為論のデュルケム―デュルケム、パーソンズ、ガーフィンケルの秩序形成の論理を比較して」『社会学評論』60(2)、2009、209頁-224頁。

キーワード：エスノメソドロジー　社会学　古典

(Nakagawa Atsushi, Matsuki Hiroto)